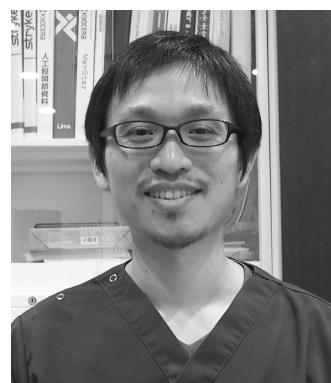


第136回

最小侵襲手術の実現で患者負担軽減①

万全の準備で臨む人工股関節全置換術！
驚異のスピードを支える高度な手術手技

世田谷人工関節・脊椎クリニック 院長 塗山 正宏
(文責・遠藤 隆)



業界の注目を集める究極のMIS

二〇一七年七月開院の《世田谷人工関節・脊椎クリニック》(世田谷区南烏山)は、下肢の人工関節手術および治療に特化したクリニックだ。院長の塗山正宏医師は、国民病ともいえる変形性股関節症のもっとも有効な治療法の一つ、人工股関節全置換術を専門とし、三〇代前半で人工股関節全置換術ラーニングセンター講師の認定を受けている。水際立った手術手技は業界内で注目を集め、開院後は「手術見学」を希望する同業者が全国各地から訪れている。「当院で実施している人工股関節全置換術は、『究極の最小侵襲手術(MIS)』であると自負しています。MISは皮膚切開が小さい手術、つまり最小皮膚切開手術を指していた時代もありました。しかし、最小皮膚切開手術は、皮膚の切開口は小さくとも、結局、筋肉や腱を切離すことにおいては、手術による侵襲の大きさを解決するものでなく、厳密にはMISとはいえません。私の実施する人工股関節全置換術は筋肉や腱の切離を伴わないもので、現状考え得るMISとしては最先端の技術であるといえます」

最先端のMISとしては、仰臥位前方進入法(DAA)・仰臥位前方側進入法(ALS)・側臥位前方側進入法(OCM)があげられる。塗山医師は縫工筋と大腿筋膜張筋の間から股関節にアプローチする仰臥位前方進入法(DAA)、および大腿筋膜張筋と中殿筋の間から股関節にアプローチする仰臥位前方側進入法(ALS)を実践している。「それは仰臥位のほうが、人工股関節のインプラント設置をより正確に実施でき、手術に際しても姿勢がいろいろな意味で安定するからです」同時に究極のMISの所以でもある「切開面が八センチ程度と小さく、そのうえ筋肉や腱の切離を伴わないで行う手術」は、仰臥位前方進入法(DAA)、仰臥位前方側進入法(ALS)ならではの特長だ。また、DAAとALSの使い分けは「患者さんの体型や股関節そのものの形態、可動域の違いなど幾つかの条件を総合的に考慮しながら決めていきます」。さらに、塗山医師が自身の実施するDAA・ALSを究極の最小侵襲手術(MIS)と自負する所以は、所要時間が三〇分と非常に短いことにもある(通常は九〇分前後)。

肉体の深部にメスを入れる外科手術は当然、患者の心身に多大な負担をかける。それだけに手術手技の一つひとつが高度、かつ迅速に行われることで、術後の手術部位の回復が早いのももちろん、感染症リスクの低下、QOLを取り戻すリハビリ期間もより短縮できる効果をもたらす。それらすべてが備わった手術こそ、トップクラスの技術と呼べるわけだが、人工股関節全置換術における塗山医師の手際はまさにそれを実現しているといえる。

主治医となり手術の奥深さを実感

塗山医師はインタビューの最中に幾度となく「手術が好き」という言葉を発した。整形外科に手術は当然付き物で、事実、二〇〇七年に母校である北里大学病院に勤務するようになって以後、数えきれないほどの手術にかかわってきた。

しかし、二〇一二年に北里大学メデイカルセンター(埼玉県北本市)に転任したのを機に、「一気に手術の楽しさに目覚めました」と笑う。「それまでは手術を担当するのは限られた患者さんだけで、患者さんとの直接的なふれあいは少ない状態でした。執刀医を担当することはありませんでしたが、患者さんの主治医ではなかったのです。メデイカルセンターに転任してからは、主治医として患者さんを担当するようになり、そのうえで手術も行う形になりました。たとえば、脳神経外科手術のようなミクロの世界と違い、整形外科で

主治医として手術を行う際には、患者さんの生活状況や人柄などまでも事前に把握したうえで行います。術後リハビリによるQOLの回復期も合わせ、その患者さんと丸ごと長くお付き合いすることになるわけです。

手術の様相はもちろん、同じ病気であつても患者さん個々によつて違ってきます。執刀医としてかわるだけで、主治医として患者さんと密接に向かい合つたうえで手術を行うようになったことで、その個々の様相の違いにより一層目覚めたといえますか、いろいろな意味で、手術というものの奥深さとか、意義などを感じ取ることができるようになつたということなのかもしれません」

手術に目覚めた後の塗山医師は、さながら『野球小僧』のような状態を呈したようだ。メジャーリーグで確固たる地位を築いたイチロー選手や、一年目から大活躍をしている大谷翔平選手が生活のすべてを嬉々として野球に捧げているのと同じように、塗山医師は「二四時間、暇さえあれば、手術のことばかりを考えるようになった」のだという。

たとえば、一流棋士が過去に指してきた数限りない対局の「棋譜」をありありと頭の中で思い描けるように、塗山医師は自らが執刀した手術

の手順を一つひとつ思い浮かべては、「あの時は、こういうやり方もあつたのではないか」「この時はもつとこうすべきだった」などと頭の中でおさらいするのだ。しかも、それは失敗した事例なのではなく、成功した手術を「さらにブラッシュアップする方法はないかと思い描く」ための、あくまでも「おさらい」なのだ。「どこかに遊びに行くよりも、そういう時間のほうが楽しかった」と塗山医師は苦笑するが、だからこそ前述のように、三〇代前半で人工股関節全置換術ラーニングセンターの講師に任命されるまでに、腕を磨くことができたのだろう。

過去の施術を頭の中に蘇らせることのできる塗山医師の記憶力とイメージ喚起力は、これから実施するべき手術の前に行うイメージトレーニングの源泉ともなっている。

リングドクターになりたくて整形へ

「外科手術の成否は八割方、あるいは九割方、事前の準備が決まるのだと考えています。また、手術は必ずしも自分の目的としていた形でのゴールを得られない場合がありますが、常に一〇〇点を目指すことによつて、アベレージを九〇点から九五点に保つことができます。このアベレージのキープと、さらなる上積みを中心に

目指すことが、整形外科医としての自分の成長には何よりも重要なのだと思つています。そして、そのため

の事前準備としては、自身の体調管理をはじめいくつかの重要な項目がありますが、もつとも重視しているのはイメージトレーニングです」

主治医として日頃身近に接している患者のさまざまなデータを前提に、実際の手術における手順を、プロスキーヤーが雪面に描く自らのシチュエーションを事前に思い描くようにして、イメージの翼を広げていく。その際に横風が急に吹いてきたらこう避けよう、雪面が想っていたよりも固かつたら（緩かつたら）こうしよう、といった具合に。過去の手術の順序を頭の中に呼び戻している時や、これから行う手術の順序をさまざまにシミュレーションしている時の塗山医師の表情は、恐らく一心不乱にボールやバットの軌跡を思い描く『野球小僧』そのものではないだろうか。

そのように整形外科医の仕事に誠心誠意打ち込んでいる塗山医師だが、産婦人科医の次男として生まれたのに反して、「高校一年生ぐらいまでは、まったく医師になるつもりはなかった」と述懐する。子どもの頃からの憧れの職業はプロレスラーをはじめとする格闘技選手。その夢に少しで

も近づきたい一心で、中学から高校にかけて柔道やアメリカンフットボールで心身を鍛えた。

「柔道に打ち込んだのは日本のプロレスラーに柔道出身の選手が多かつたからで、アメリカンフットボールはアメリカのプロレスラーにアメフト出身の選手が多かつたから（笑）」

肉体の鍛錬はさらに医学部に入学してからも続くことになるが、高校一年生まで医師になるつもりになつた塗山医師が高校二年次に医学部進学へと志望を変えた背景には、「子どもの頃から患者さんのために一生懸命に働いている父親のあり方が、やはり素晴らしいものだと思感したこと」が要因となつた。さらに整形外科を目指した背景には、「正直、整形外科医になれば格闘技の試合でリングドクターをすることができると語ることがあつた（笑）」

（以下、次号に続く）

プロフィール

二〇〇五年、北里大学医学部卒業後、北里大学病院にて研修。〇七年に同大学病院整形外科勤務。北里大学東病院、北里大学病院救命救急センターを経て、一二年より北里大学メディカルセンター勤務。一七年に世田谷区立人工関節・脊椎クリニックを開業。現在に至る。日本整形外科学会認定整形外科専門医、同運動器リハビリテーション専門医、日本体育協会公認スポーツドクター、身体障害者福祉法指定医。